

審査の結果の要旨

氏名 趙貴花

本博士論文は、エスニック・グループとしての中国朝鮮族の移動に焦点を合わせ、北京、ソウル、東京における民族誌的記述を積み上げることによって、移動と定住とが、彼らのアイデンティティの形成や子どもの教育に与える影響を明らかにすることを目的とした。序章においては課題の設定、中国朝鮮族の移動の歴史的背景と先行研究のレビューとを行ない、複数の場に移動した中国朝鮮族を考察したフィールドワークとしての本研究の特徴を、先行研究の中に位置付けた。

三部構成における第 I 部では、出身地域である中国東北部の延吉とハルビンにおける公立朝鮮族学校の二言語教育に注目し、それが国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティの継承に寄与してきたこと、改革開放以降には学校自体が漢族や韓国人にとっての言語教育機関としての機能を併せ持つようになった経緯とが分析されている。

第 II 部は、主要な国内移動先である北京に移動した中国朝鮮族が、子どもの教育において漢族社会への適応を目指す一方で、補習校や家庭教育による朝鮮語の維持を同時に志向する過程を描き出している。さらに「韓国城」(コリアンタウン)に注目し、それが、韓国人だけの閉鎖的なコミュニティではなく、中国朝鮮族や北朝鮮からの移住者に加えて、留学先から帰国した中国人「グローバル人材」の受け入れや、流行に敏感な「哈韓族」(ハーハンズー、韓国好きな人々)若者を引き付け、日本人駐在員家族も好んで居住する、東アジアの最新のファッションと食材とを提供するハイブリッドな文化街を成立させており、新たなライフスタイルと、それを共有する開かれた都市空間が生み出されている状況を分析している。

第 III 部は、ソウルと東京の調査をもとに、中国朝鮮族の「帰郷」であった韓国において、朝鮮族出稼ぎ労働者への差別を経験することで、積極的に受け入れられた高学歴者の間においてさえも、韓国人化をめぐるアイデンティティの揺らぎが生じている点を考察している。次いで日本に移動した人々は、相対的に制限が少ない中で、就学・就職・居住・親戚訪問等々において日中韓を行き来し、その結果、「東アジア人」を自認するほどのハイブリッドなアイデンティティを獲得してゆくと同時に、中国語と韓国語と日本語という言語資本の価値に気づき、子どもの言語教育を戦略的に用いている様子が示されている。

本論文は、中国朝鮮族に関して、複数の地域に跨るフィールドワークを統合することで、移動する主体としての人々のアイデンティティの意識化と、それが子どもの言語教育戦略として可視化されることを立体的に考察するものであり、複数の文脈での民族文化の維持と可変性、教育戦略やアイデンティティのあり方について、教育人類学的な視点から独自の貢献をするものである。以上により、本論文は博士(教育学)の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。